

風景

瀬戸内寂聴著

この本は、7つのエッセイからなっています。そのうち、「デスマスク」「絆」「そういう一日」「骨」は自身のことを綴っていて、作者に親近感を持ちました。瀬戸内寂聴は、夫も子供もありながら出奔し、不倫に走った時期があると自ら述べているのは周知の通りです。人の道に外れた経験があるだけに、現在、仏法者として悩める者の気持を、さりげなく受けとめ、明るく諭す数々の講演と著書は人を惹きつけるのだらうと思います。さて、先のエッセイでは、はじめて受賞した安吾賞を語りながら、破天荒な生き方だった安吾の代表作「墮落論」の力強い言葉が、女の道を踏み外した際の立ち直りになった聖書だと回想しています。墮落論は悲観的な視点から物事を観、生きているから墜ちるとの考えです。作者は、関係を持った男性の悪口は全く書いていません。むしろ、互いの違う生き方を尊重し、目指す方向の違いから自分を悟っていったと解釈できます。それから、忘れ得ぬもう一人に、作者が北京在住時に、最初の小説「吐蕃王妃記」の原案を授かったチベット研究者の佐藤長氏を挙げています。氏からは、敗戦で気落ちした作者に、「しっかりしなさい。いきるんだ。小説を書けばいい」と叱咤激励され、小説家の決意を固めたのです。瀬戸内寂聴氏にも、弱い自分があったのを知りました。そして、倫理を外しても純真に努力すれば幸せになれることを学びました。

F・M・

角川学芸出版社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞